

# 永谷に住んだ宅間の殿様

港南区の民話

(出典：『ふるさと港南の昔ばなし50話』)

鎌倉幕府がほろびて、京都に室町幕府が新しくできましたが、鎌倉には鎌倉府という、東国十か国を支配するための役所が置かれました。

そして、その最高責任者を鎌倉公方といい、将軍である足利氏の血筋にあたる人が代々その地位につきました。

しかし、実際には、鎌倉公方の重臣である上杉氏が、関東管領という職について東国を支配する実権を握っていました。

室町時代も進むにしたがって、この上杉氏も四つの家に分かれて、互いに権力争いをするようになりました。

その四つとは、それぞれ鎌倉にあった自分の根拠地の名前を取って、山内、犬懸、扇谷、宅間のそれぞれ異なる上杉氏をいいます。

この中で、宅間上杉氏はいつのころからか、永谷に根拠地をおくようになったらしく、江戸時代の末に書かれた書物には、宅間氏の子孫である上杉乗国が、永谷の地にお城を築いたと記されています。

宅間上杉氏の築いた城が、どこであったかは、正確には分かりません。

しかし、永野小学校のあたりに伊予<sup>いよ</sup>殿<sup>と</sup>根<sup>ね</sup>という地名が残っているのは、乗国の子の憲方という人が、伊予とよばれていたので、伊予の殿様の屋敷が館のあった所という意味ではないかと言われています。

また、永谷天満宮や貞昌院という寺のあたりには、環濠の跡があり、その背後の小高い丘陵には、城跡特有の人工的に削って平らにしたと思われる土地もありました。

そのため、この付近一帯は、宅間上杉氏に関わる武将が築いた城跡ではないかと考えられています。

その後、戦国時代には宅間上林氏は、小田原北条氏に仕えるようになりましたが、もともとは格式の高い家柄なので、後北条氏はふつうの家臣とは別あつかいで、宅間殿と尊称をつけて呼んでいました。

小田原北条氏が没落した後は、宅間上杉規富は徳川家康の旗本として関ヶ原の戦いに出陣した後、保土ヶ谷に移るようになりました。

現在は、平和な上永谷のあたりも、むかしは武者がたむろして、大声でどなる声が響きわたる物騒な里であったのかもしれませんが。

# 勝海舟の書 一永谷学校一

## 港南区の民話

今から百三十年ぐらい前のお話です。

江戸幕府と言って、武士が政治を行っていた頃は、今の学校にあたるものは寺子屋でした。

子どもたちが通い、「読み」、「書き」、「そろばん」を習いました。

しかし、女の子や貧しい家の子は、なかなか行かれなかったようです。

江戸幕府の政治は、新しい世の中についていけずたおれました。

新しく生まれた明治政府は、新しい政治を次々に行いました。新しい学校制度により、寺子屋にかわる『永谷学校』ができ、その『永谷学校』という学校名を、勝海舟というとても偉い方が書いてくれました。

この「書」が、いまも横浜市立永野小学校の宝物として、たいせつに残されています。

この勝海舟という人は、「黒船」がわが国に貿易を求めてやって来たころ、西洋の学問や海軍のことを学んでいました。

幕府の役人軍艦奉行になり、咸臨丸という幕府の軍艦の艦長として、日本人による太平洋を横断した最初の人です。

幕府が倒される時は、新政府軍の西郷隆盛と話し合い、江戸城を明け渡し、攻撃を中止させて、江戸の町民や江戸城を戦火の犠牲から守りました。

また、新しい明治政府では、海軍卿など大事な任務につき、江戸から明治にわたる、二つの時代にまたがる大政治家でした。

こんな大政治家が、こんな小さな『永谷学校』の校名を書いてくれたいきさつには、次のような平野玉城と永谷学校にかかわる出来事がありました。

玉城は、江戸に生まれ代々江戸幕府の家来でした。慶応四年（1868）の夕がたごろ、下永谷の村長福本さん宅へあわただしく、

「たのもう」

と、飛び込んで来た者がいます。

「私は江戸幕府の役人で勝海舟の家来、平野玉城と申す者。幕府を倒すために江戸城へ進撃中の新政府軍西郷隆盛の動きをさぐるためにきたところ、敵方に見つかってしまい、この永谷へのがれてきました。ぜひ私をかくまってください。お願い申す」

「よろしい！」

福本さんは立派そうなこの武士を、醤油蔵にかくまってやりました。

しばらくすると、政府軍の兵数名が来ました。

「確かにこの家へ幕府方の武士がやって来たようだが、すなおに居場所を申せ！」

「おおせのとおり、今しがたこの玄関へやって来て、ためらっていましたが、何も言わず、すぐに右手の竹やぶの方へ消えて行きました」

「さようか!？」

強そうな二人が残って、他の者は竹やぶへ飛んで行きました。

母屋、物置、蔵と屋敷中を探しましたが見あたりません。

「さては、取り逃したか」

一同は引き上げて行きました。

「ああ助かった！」

玉城は命拾いをしたのでした。

5年後、玉城は命の恩人、福本さん宅をお礼に訪れました。そして、村人たちとも当時のことを話し、懐かしみました。

この方に永谷の寺子屋の師匠をお願いし、子どもたちの手習を頼みますと、こころよく引き受けてくれました。

翌、明治6年、玉城師匠は村人のすすめで永谷学校の先生になりました。

先生が就任すると、入学者が急にふえました。

建物が狭くなり、父母たちは見るにみかねて、明治12年、永谷村に永谷学校の校舎を村人の手で作りました。

玉城先生は、その落成記念式にあたって、むかしつかえた師匠勝海舟に、永谷学校の校名の書をお願いしました。

喜んでお受けくださり、さっそく送られてきました。

日本の夜明けの一大政治家勝海舟も、玉城の恩人ともいえる村長福本さんのことをよくわかっていただいていたのでしょう。

やがて明治22年、永谷、下野庭、上野庭の三村が合わさって、「永」と「野」の二字をとって永野村が生まれました。

それにともなって校名も、『永谷学校』は『永野学校』とかえられましたが、今もこうして、『永谷学校』の伝統の書が残っているわけですね。

# 永谷天神と菅秀才

## 港南区の民話

永谷天満宮は、永谷の天神さまとして親しまれ、菅原道真が、自分の姿を鏡に映して自分で刻んだ、三つしかない木像のうちの一つをもつ神社として、知られています。

菅原道真は、平安時代の人ですが、醍醐天皇の信頼が厚く、時の支配者である藤原氏と対立し、延喜元年（901）九州の大宰府に流され、延喜三年その地で亡くなりました。

文学や文章を書くことに、すぐれていましたので、学問の神様といわれています。

菅原道真には、十三人の子どもがおりましたが、その第五子敦茂は、父の才能を受けつぎ菅秀才と呼ばれるほどで、父の道真も大いに期待し、三体の道真像のうちの一つを、そつと渡していたのでしょう。父の道真と共に、子どもたちも都から各地に追放されました。

伝説によると、敦茂は永谷の郷に移されたということです。

菅秀才敦茂が、相模に住んだという記録はありませんが、いまの上永谷の天神山のふもと、つまり、現在の貞昌院あたりに住んでいたと伝えられています。

敦茂は、天神山の頂上に立ち、はるか遠くの九州太宰府の父、道真公をしたいながら、朝夕のご挨拶をされたということです。

山の上には、敦茂が愛用した筆や、髪の毛を埋めたとも伝えられる、菅秀塚の碑があります。

むかし、その塚の上にあった杉の老木を切ったところ、村の人びとがケガをしたり、病気になったりしたと伝えられています。

菅原敦茂がいつ生まれ、いつ死んだのか、くわしいことはわかりません。文章博士や、そのほか重要な役目につぎつぎとつくなど、親子二代の学者として有名でした。

道真像は敦茂から多くの人を経て、上杉乗国に伝えられ、夢のおつげによって、明応二年（1493）ここに社を造り、ご神体としておまつりしました。これが現在の永谷天満宮です。

外の二体の道真像は、道真のお墓のある福岡県の安楽寺と、生まれたところの大阪府の道明寺にあります。